

CD レビュー

インド実験音楽シーンの現在

—Anthology of Exploratory Music from India の作品を中心に

井上 春緒

インド音楽といえば、どんな音を想像するだろうか。エスニック雑貨店で流れている、「エキゾチック」な音楽をイメージする人も多いだろう。あるいは、ハリウッド映画で使われているアップテンポでコブシをきかせた映画音楽だろうか。それとも、瞑想的な古典音楽の弦楽器の響きかもしれない。インド音楽とは何かと問えば、千差万別の答えが返ってくるだろう。

しかし、ここで述べられる様な実験音楽をイメージする人は、ほとんどいないのではないだろうか。我々が考えるインド音楽は、民族音楽としてジャンル分けされている。つまり、インド音楽はすでにメインストリーム西洋音楽との対比で、特殊な音楽ジャンルと見做されている。さらに「インドの実験音楽」といえば、西洋メインストリームからも、インド古典音楽や映画音楽からも排除された、謂わば「二重に周縁化された音楽」なのかもしれない。しかし、近年このインド実験音楽シーンがにわかに盛り上がりを見せている事は、あまり知られていない。

本稿では、そんな黎明期にあるインド実験音楽シーンの一端を、2021年に発表されたコンピレーションアルバム、*Anthology of Exploratory Music from India* に作品を寄せている音楽家と彼らの音楽をレビューすることで概観する。

本作品の概要

本作品は、イタリア人音響アーティスト、ラファエレ・ペッセッラのレーベル USG (Unexplained Sounds Group) から発売されている非西洋の実験音楽家やアヴァンギ

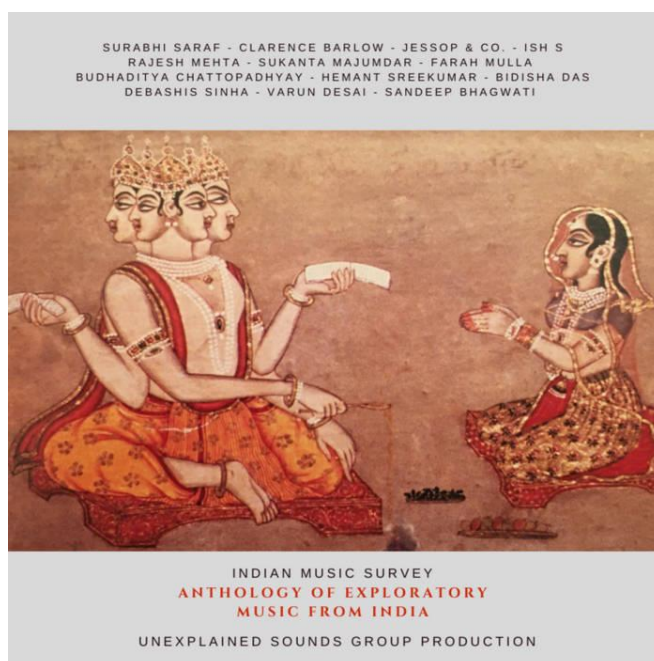


図 1 *Anthology of Exploratory Music from India* (2021)
出典: <https://onl.sc/tN8ub2E>

ヤルド音楽家をキュレートしたコンピレーション・アルバム・シリーズ「探検的な音楽のアンソロジーAnthology of Exploratory Music」の一作品として制作された。インド人実験音楽家で音響研究者、ブッダディヤ・チャットパディヤイは、共同プロデューサーとして世界中で活躍するインド人実験音楽家の作品を選出した。チャットパディヤイは、本作品の制作意図を以下のように記している。

USG からリリースされた、この新しいインドの探検的な音楽と音響作品のコンピレーションは、古典音楽や民謡などを含むインドの伝統的な音文化から脱却することを目指す一連の音楽活動を紹介することを目的としている。一方で、繰り返されるモチーフ、音響、或いはテクスチャやオープンエンドな構成といった、インドの伝統音楽に聴かれるアイデアやインスピレーションを継承している。伝統とモダニティの間の脆弱であり複雑な関係は、インド生まれの音響アーティストや、実験音楽家による作品群が共有する重要な問題意識である。「サウンドアート」とは何か、「実験的」とは何かについては、多くの時間を割いて議論することが可能であろう。ただ言えるのは「サウンドアート」は、西洋で生まれた概念であるが、「実験的」なアプローチは、インドの音楽家達が長い時間をかけて、伝統の継承と発展の間で取り組んできたものなのである。（CDライナーノート前半部）

チャットパディヤイは、サウンドアーティストとして西洋的な音響学的ターミノロジーを内面化しながら、植民地期を通して構築された音楽文化をめぐる西洋と東洋の不均等な権力関係に、前近代のインド音楽文化の価値観を照射することで対抗してみせる。

彼は論考「大地から響く音：前近代インドにおける音実践 Sound from the Ground: Pre-modern Sonic Practices in India」（2022）において、北インドの古楽弦楽器ルードラ・ヴィーナの音響的特徴に言及しながら、インドに発展していた前近代の音楽的テクノロジーに



図2 ブッダディヤ・チャットパディヤイ

<https://www.stage32.com/profile/61536/about>

耳を傾けるよう喚起する。さらに「リ/サウンディング・サウス Re-sounding Souths」（2023）では、ジョン・ケージに影響を与えたギター・サラバーイーやラ・モンテ・ヤングに影響を与えたプラン・ナートなど、インドの古典音楽家を引き合いに出し、西洋現代音楽の発展に、南アジア系音楽家が重要な役割を果たした事例を書き記す。チャットパディヤイが想定しているインドの伝統的な音楽文化が、サンスクリット音楽文化¹に

偏向している点は、いささか気になるところであるが、ポストコロニアルな文脈におけるインドの音響実践の潮流を表す、興味深い内容の論考である。

本作品のラインナップ

本コンピレーションアルバムに収録された14人のインド人音楽家と作品名は、以下の通りである。

1. スラビー・サラフ *illuminen* 11分38秒
2. クラレンス・バーロウ *until... #3.1* 9分8秒
3. JESSOP & CO *To live work and die in East Kolkata* 7分33秒
4. ISH S - A *9 beat interlude for 3 in the morning* 6分32秒
5. ラジェーシュ・メーター *Sky Cage* 5分24秒
6. スカンタ・マジウムダール *Rites of Labour* 5分36秒
7. ファーラー・ムッラー *Out of Reach* 6分4秒
8. ブッダディヤ・チャットパディヤイ *Dhvāni* 5分00秒
9. ヘマント・シュリークマール *Ajivika* 6分51秒
10. ビディーシャ・ダース *Dure (Far away)* 6分00秒
11. デーバシーシ・シンハー *rig_veda000_03* 6分43秒
12. ヴァルン・デサイ *Jessore Road* 7分24秒
13. サンディープ・バーグヴァティ *DhvaniSutras_SmrutiRanga* 5分31秒
14. ナクール・クリシュナムルティ *Sukshmasthayi* 9分35秒

各作品の紹介

1. スラビー・サラフ - *illuminen*

スラビーは、インド中部の都市インドール出身のメディア音響アーティストである。シカゴ美術研究所（SAIC）で学んだ彼女は、現在はサンフランシスコにおいて、アート集団 *Centre for Emotional Materiality* を立ち上げて、現代アート作家とのコラボレーションを展開している。本CDに入っている *illuminen* は反復される女性の声が折り重なり、独特な浮遊感をもった作品だ。背景に鳴っているホワイトノイズやパルス音は、まるでインド古典音楽のバックで鳴り響くタンブーラのように、湿気のある音空間を作り出している。

2. クラレンス・バーロウ - *until... #3.1*

クラレンスは、インド現代音楽界の重鎮である。ヨーロッパの大学で作曲を学んだ彼の作風は、インド古典音楽の影響をあまり感じさせないものである。しかし、本CDに

入っている作品は、打って変わって弦楽器サロードをバックに展開されるタブラーのソロ演奏である。タブラーの演奏は、非常に素晴らしいが、インド古典音楽を聴き慣れた筆者からすると、なぜクレランスがこのCDにおいて敢えて、古典色を全面に押し出してきたのかが不可解だ。

3. JESSOP & CO - To live work and die in East Kolkata

JESSOP&CO は、コルカタの実験音楽家アヌパル・アディカリとシュボジョーティー・センによるデュオ・ユニットである。映画音楽の暴力的なカットアップやノイズを取り入れた実験的音響が、彼らの作風であった。しかし、本作品は、ずっと内向的な感じを受ける。ゆっくりと展開するドローン音楽は、彼らの他の作品を知っている者には、不気味でさえある。

4. ISH S - A 9 beat interlude for 3 in the morning

ISH S はデリー出身のサウンド・アーティストで、元々はギターリストであった。ギターと打ち込みを使った、綺麗な作品には定評がある。明確なビートとアルペジオを基調にした本作品も、彼らしい作風に仕上がっているといっただろう。横浜トリエンナーレ 2020 にも参加したアーティストで、日本でもある程度の知名度があるようだ。良くも悪くも癖のないスマートでアーバンな感じが、特徴と言えるかもしれない。

5. ラジェーシュ・メーター - Sky Cage

トランペット奏者のラジェーシュは、トランペットでラーガ音楽を演奏する実験音楽家だ。インド古典音楽のボキャブラリーをアレンジしたラジェーシュの楽曲は、ヒンドゥスターニー古典音楽の精神性を深く探求したトランペット奏者のジョン・ハッセルへの、インド人からの返答とも聴こえる。いずれにせよ、本作品で演奏されているトランペットは古典音楽でもなく、現代音楽でもない境界線上で鳴り響く。



図 3 ラジェーシュ・メーター

<https://onl.sc/t2U6EEy>

6. スカンタ・マジュムダール - Rites of Labour

ベンガル系インド人のスカンタは、映画の音響から、フィールドレコーディングまで幅広く行う音響アーティストである。歌手であるモウシュミ・バーウミクとともに 2003 年よりトラベリング・アーカイブ (<https://www.thetravellingarchive.org>) というプロジェ

クトを推進しているが、これはベンガル地方の民謡や民話、あるいはその他の環境音を録音し、世界中の展示会などで聴かせるというものだ。本作品も、おそらくベンガル地方の農村地方のフィールドレコーディングである。脱穀機のようなものが回っている音と、儀礼の太鼓、鐘、人々の歓声、歌声、祝詞が様々にオーヴァラップしながら、秘儀的空間を醸し出す。

7. ファーラー・ミュラー - Out of Reach

こちらもフィールド録音を基調にした、作品であるが、スカンタの録音より、都市のインダストリアルな印象を受ける。作者については、情報が無いので詳細がわからないが、作品の音質は暗く重い。ミュージック・コンクレートの影響を、色濃く感じさせるサウンド・アートである。

8. ブッダディヤ・チャットパディヤイ - Dhvāni

プロデューサーでもあるブッダディヤであるが、彼自身多くの作品を発表している音響アーティストである。本作品は、機械によって自動化された前近代的なサウンドを鳴らすというコンセプトのもと、宗教儀礼で使われる鐘を AI によってランダムに鳴らすサウンド・インスタレーションの録音からの抜粋である。インドの前近代の音響空間と、西洋近代以降の機械文明の相剋を問題意識にもつブッダディヤらしい作品だ。

9. ヘマント・シュリークマール - Ajivika

ヘマントはデリー在住の、音響アーティストであり、日本や欧米の実験音楽やノイズ・シーンに触発された第一世代のインド人実験音楽家とあってよいだろう。彼は CONTENTS というカセットテープをリリースしており、映像作家であり REProduce Listening Room という名前のアンダーグラウンド系音楽イベントを企画するプロダクションの主催者ラナ・ゴーシュが映像を提供している（写真3）。憑依やカルトをテーマにしたその内容は、人間がコントロールされやすい現代社会の危うさをインド的文脈で描いた、インドノイズの金字塔的作品とあってよいだろう。本 CD に寄せている作品は、静寂の中からゆっくりとホワイトノイズが聴こえては消えていく、無機質で空虚な部屋にいる感覚になるアンビエントノイズである。



図 4 EVERYONE IS CONTENT
<https://vimeo.com/386874656>

10. ビディーシャ・ダース - Dure (Far away)

ビディーシャは、バンガロール出身の気鋭の音響アーティストである。彼女は、東インドのオディッシャ州のトライブ、パウディ・ブーヤンを被写体とした民族誌映画を *Voice from Kandadhar Hills*(2013)を制作した映像作家でもある。フィールドワークで収録した水の音や風の音などの自然音を、電子音と織り交ぜた作品を多く制作している。本作品は、電子音楽が鬱蒼とした密林で鳴り渡るようなポリフォニックなサウンド空間が特徴的である。

11. デーバシーシ・シンハー - rig_veda000_03

デーバシーシは、パーカッションニストとしての訓練を受けた音響アーティストである。アコースティックな音源を AI などで加工し、あらたな表現や意味がうまれる即興的作品へと昇華させる。本作品は、サンスクリット聖典を読む女性達の声が、カットアップ、コラージュされ、時空を超えて電子音楽と古代儀礼が混ざり合ったかのような、謎めいた内容になっている。

12. ヴァルン・デサイ - Jessore Road

コルカタ在住の音楽家ヴァルンは、Liquid Frequency というレーベルのオーナーでもあり、20年近くインドのアンビエント・ミュージック・シーンを牽引してきた。ハイクオリティのアンビエント作品を無料でダウンロードできるシステムをいち早く取り入れ、インドのエレクトロニカの普及に取り組んできた。パンデミック期には、インターネット上で集積した国内のアンビエント作品を *Social Isolation*、*Social Desolation* の二部作で発表した。本作品は、日常的なインドの街中のサウンドスケープが徐々に、非日常空間に移り変わっていく構成になっている。

13. サンディーブ・パーグヴァテ - DhvaniSutras__SmrutiRanga

ムンバイでドイツ人の母と、インド人の父の間に生まれたサンディーブは、西洋クラシック音楽を学んだ現代音楽作曲家である。インド古典音楽の文法を取り入れた楽曲は、この作品集の中にあると、やや新鮮味に欠ける。既往のインド実験音楽がどのようなものであったのかを再認識する上での、参照点となる作品だろう。

14. ナクール・クリシュナムルティー - Sukshmasthayi

インド古典音楽の文法を内面化しながら、普遍的な実験性を感じさせる内容の作品である。ピアノと声というシンプルな構成ながら、そのハーモニーが空間的広がりを構成し、その中をゆっくりと男女の声が蛇行する。静寂と過密が入れ替わるこの作品の中に、

西洋と東洋といった表面的な二分法を超えた、新しいインド実験音楽の萌芽を聴くことができる。

新たなインド音楽のこれから

インドから発信されている新しい音の響きは、近代西洋によって構築されてきた音楽的価値観をどのように組み替えていくだろうか。録音技術やCD（あるいはストリーミング）などを通した一般化された現代の聴取文化に対して、インドの実験音楽は、どのようなポジショニングをとろうとしているのか。チャットパディヤイは、ライナーノートの後半でこう述べている。

このコンピレーション・アルバムの新しい点は、インドの音に対する思考の歴史的軌跡と、アーティストたちが時間性と空間性の解釈と再構成をめぐって交渉し続ける録音や、ミキシングなどの近代的技術の介入との間の緊張関係を、明るみに出しているところである。音響を媒介するものとして西洋で発明されたCDが、インドの音響アーティストにとって制約となる可能性がある。したがって、このコンピレーションは、CDは聴取体験の単なる痕跡であり、その一部を切り取ったものだという事を、聴衆が認識するよう求める。この時空間的な緊張は、（脱）植民地性に関するいくつかの問題と、南アジアで興隆する音文化が抱える懸念を、新たな視座から浮き彫りにする。（CDライナーノート後半部）

インド音楽と西洋音楽、或いは東洋と西洋という古くて新しい二項対立に我々の意識を向ける本アルバムのコンセプトは、それぞれの作品やライナーノートによく表れている。グローバルサウスの中心として経済成長が著しい大国でありながら、伝統や因習の強い拘束力をもつインドで、今後どのような音響作品や聴取文化が生み出されていくのだろうか。言語や宗教が多様なインドの中で生まれる実験音楽は、一括りできない豊穡な音の世界として展開していくことだろう。欧米とも日本とも違う、新たなインドノイズは、オールドデリーの喧騒にかき消される事なく、逞しく鳴り響く。

参考資料

ブッダディヤ・チャットパディヤイの論考

“Re-sounding Souths” (2023)

<https://www.ctm-festival.de/magazine/re-sounding-souths>

“Sound from the Ground: Pre-modern Sonic Practices in India” (2022)

https://serendipityarts.org/writing_initiatives/sound-from-the-ground

Anthology of Exploratory Music from India

<https://onl.tw/StAmD1u>

注

ⁱ サンスクリット音楽文化とは、古代サンスクリット語芸能書『ナーティヤ・シャーストラ』を中心とした音楽理論や美学体系を指す。現代のインド音楽を古代のインド音楽文化と接合する語りは、ヒンドゥー至上主義との親和性が高く、ヒンドゥスターニー音楽の成立に大きく関わったイスラーム文化を蔑ろにする危険を孕む。